

土佐のわらべ

第416号 《第438回（2016. 6. 9） 子どもの本の読書会記録》参加者4人・文書参加4人

『暗やみの中のきらめき 点字をつくったルイ・ブライユ』

マイヤリーサ・ディークマン／著

古市真由美／訳

森川百合香／絵

汐文社

本書は、約200年前フランスで点字を考案し発展させたルイ・ブライユの生涯を、現代のフィンランドの小学校に通う視覚障がいのあるレオを通してみつめています。盲学校の子どもたちが夜中にベッドを抜け出し、点で表す文字の秘密の発明、工夫を先生に内緒でしていたなんて、驚きです。伝記という硬いイメージがありますが、序章から話に引き込まれ、私もレオと一緒にサミ先生からルイの話の聞いているような気持ちになりました。

3歳の時、事故で視力を失ったルイは、10歳でパリ王立盲学校に入学します。そこで、触って読む点の文字「ソノグラフィ」に出会い、点字の研究を進めていきます。フランス革命後の騒然とした社会で、ルイの困難と努力は計り知れません。「本を読み、世界を知りたい」という気持ち（本好きな人にはうなずけることでしょう！）を持ち続けられたのは、幼いころ家族から物語を聞かせてもらった幸せな記憶があったからでしょうか。点字の完成は、家族や周囲の人々の理解と協力、愛情、何より盲学校で共に励ましあって過ごした友がいたからこそ成しえたことだったのでしょう。「周りの大人が、子どもの特性や興味を受け入れて、どう考え導いていくかで子どもの生き方が左右される。子どもたちを取り巻く環境は昔も今も厳しいものがあるが、子どもたちが希望を持って成長していけるような社会となつてほしい」「暗い時代であっても感性の豊かさと知性のきらめきを失わない。本書のタイトルは何重にも折り重なった意味が含まれている」という感想が聞かれました。

過去と現代を交互に語ることで、今に至る点字の発展の必然性に気づかされます。

ルイとレオの共通点は音楽。チェロやオルガンの演奏家でもあったルイは点字楽譜も考案します。

IT技術の発展著しい昨今、パソコンを使ったソフトや、音声とテキストと画像がリンクして出力されるデジ図書などの開発が進み利用されています。2年後に移転整備される高知点字図書館の新名称が「オーテピア高知 声と点字の図書館」に決まりましたね。点字図書に加え、録音図書を利用される人も多いからそうです。

この日、テーブルには点字付き絵本を数冊用意。今まで点字に触れる機会もなかったのですが、初めて触れてみました。触って楽しめる絵（触図）と文字（点字）で構成されています。『ぞうくんのさんぽ』や『ぐりとぐら』など。目が不自由でも、子どもたちには本を読む楽しさを知り、想像の翼を広げてほしいと願います。

参加者の皆さんからは「自分の日々の人への接し方や考え方などを振り返ることができ、自分も頑張ろうと思えた」「どんな障がいがあったとしても内面の世界はみんな同じように豊かなのだと、あらためて気づかされた」という感想も聞かれました。

本書は、2011年フィンランドで前年に発表された児童向け作品の中から、最も優れた作品に贈られるアービッド・リーデッケン賞を受賞しています。ルイ・ブライユのことを詳しく知りたい方は『ルイ・ブライユの生涯 天才の手法』を読んでみてください。写真や絵も豊富で時代背景も詳しく、読みやすい内容となっています。

(C. O)